



「人類の叡智の結晶」 リベラリズムを守れるか

かつて『歴史の終わり』で、「政治の最終形態はリベラルな民主主義だ」と論じた著者が、今日のリベラリズムの危機的状況に一石を投じた。衰退の原因を明らかにし、数々の批判理論にも反駁、リベラリズムを死守すべきだと断言する。そのためには個人として、共同体としても極限を求めず、中庸を取り戻す自制心こそが鍵だとフクヤマは言う。リベラリズムはわれわれの意識や努力でこそ守られると気が付かせてくれる一冊である。

リベラリズムへの不満

フランシス・フクヤマ・著／
会田弘継・訳
新潮社／2420円

ロシア・ウクライナ戦争でにわかに注目を集めるNATOだが、日本でその実相はどれほど知られているか。本書では、意思決定や予算の仕組み、創設以来の歴史、ウクライナ危機への加盟国の対応、日本との協力など——総勢三八名のエキスパートたちが、基本事項の平易な解説に加え、直近の動きまでフォローして多様な観点から論じる。ニュースのトピックや、関心のある章から読んでも、国際安全保障への理解が深まるだろう。

欧州大西洋の安全保障 その「屋台骨」とは



NATOを知るための71章

(北大西洋条約機構)
広瀬佳一・編著
明石書店／2200円

とあるポーランド政治家は、米国の同盟は「カバと結婚するようなもの」という。最初は愛くるしい存在だが、やがて自分も気付かぬうちに相手を押しつぶしてくる。本書で描かれるのは、ポーランドと米国の連携に尽力し、NATO拡大に奔走しながらも、ポーランドの体制転換後に不遇の扱いを受けることとなったスパイたちの物語だ。彼らの証言をもとに、手に汗握る歴史の舞台裏が見事な筆致で描き出されている。

同盟の歴史の 舞台裏 元スパイたちの証言



鉄のカーテンをこじあけろ

NATO 拡大に奔走した米・ポーランドのスパイたち
ジョン・ボンフレット・著／梁田屋茂・訳
朝日新聞出版／3520円



何が「人種」を 創り出したのか

「黒人大統領」「アジア系移民」など、アメリカ社会を語る際に多用される「人種」カテゴリー。生物学的実体がないにもかかわらず、なぜ「人種」間で新型コロナによる入院患者数の大きな格差を生むまでになったのか。本書が実証するのは、広告や科学言説、社会制度などを通じて、ステレオタイプや差別が再生産される社会システムだ。人種主義を「ほとんど」ためには何が必要なのか。個人の実践を踏まえて問いかける。

アメリカの人種主義

カテゴリー／アイデンティティの形成と転換
竹沢泰子・著
名古屋大学出版会／4950円

本書は、日本に西洋文化の波が押し寄せた明治期から、今をときめくはやりものまで、日本人をとりこにしてきた洋菓子の成り立ちを解説する。洋菓子の日本社会への浸透は、明治維新、富国強兵、戦争など近代化を経験する中で、異文化の受容過程と表裏一体である。激動の時代を生き抜く人々と共にあった、お菓子の「甘やかな歴史」を紐解くことは、意図せざる「パブリック・ディプロマシー」を読み解くことも知れない。

人生に寄り添う お菓子を 外交戦略として 読む



日本人の愛したお菓子たち

明治から現代へ
吉田菊次郎・著
講談社選書メチエ／3300円

約一〇〇年前の韓国で登場した大衆音楽が、世界を席巻するまでの激動の歴史だが、本書は単なる「K-POP史」ではない。なぜなら韓国の音楽事情を見るだけでは、その快進撃の理由がわからないからだ。K-POPの形成と発展をもたらした歴史的・社会的背景に目を向けることで、文化が国境を越えるダイナミズムが読み取れる。K-POPファンはもちろんのこと、「グローバル化」の側面を知る上でも興味深い一冊だ。

世界が熱狂する K-POP 激動の一〇〇年をたどる

K-POP現代史

韓国大衆音楽の誕生からBTSまで
山本浄邦・著
ちくま新書／946円

